

# 民主島根

2022年  
**9.11**  
第1411号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444  
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

## 統一協会 県内でも靈感商法被害 旧統一協会と自民党の癒着に怒り感じる 党県議団が被害実態を聞く会ひらく



参加者、報道陣を前に被害実態を語るAさん（県庁）

日本共産党県議団（尾村利成団長、大國陽介幹事長）は5日、旧統一協会をめぐる問題で2001年〜04年頃にかけて靈感商法被害に遭ったAさん（50代女性・松江市在住）からヒアリングを行いました。

計約70万円の被害額だったと語るAさんは、松江市内のビル施設で中学時代の友人（整体師）から無料で整体を受けた際、朝鮮人参濃縮液（7本入り・50万円）を勧められやむなく購入。願いが叶う紙（半紙）のお札を家族5人分を2回、計3万円を購入させられたと告発。



リレートークで訴える大國県議（左手前）（出雲市役所前）

「国葬やめよ」市民が集会  
戦争法廃止出雲集会実行委がアピール

安倍元首相の「国葬」中止を求める集会（戦争法廃止出雲集会実行委員会主催）が3日、島根県出雲市で開かれ、約50人が参加しました。

国葬反対のプラカードや横断幕を掲げ、「私たちの税金使わないで、私は自分の心を動員されたくない」「自民党と統一協会問題を明らかに」と市民

着に怒りを感じたから。国民を助ける政治家が反社会的カルト団体とながっているのは許せない。実態を解明し、二度とこのような被害が起らないようにしてほしい」と要望しました。

ヒアリングには県執行部、松江市議団、報道関係者が耳を傾けました。

### 県政・市政報告会

10月9日(日) 13:30~ 松江テルサ大会議室

県議会議員 尾村としなり  
舟木健治、橋ふみ両松江市議もお話します。

10月15日(土) 14:00~ ビッグハート出雲 黒のスタジオ

県議会議員 大國 陽介  
後藤由美、吉井安見の両出雲市議も報告します。

されず、国葬が決められたことは許せない」「弔意の強制には反対」という世論が広がっている。最後まで反対の声を上げましょう」などと訴え、共産党の大國県議は、

### 弔意の強制するな

### しまね労連が県に要請

しまね労連は2日、丸山達也知事に安倍元首相の国葬を中止し、県民自治体への弔意を強制しないよう要請しました。

村上一議長、池場哲哉事務局長、加藤朋美書記が県庁を訪れ、日本共産党の尾村利成、大國陽介両県議、舟木健治、橋ふみ両松江市議が同席。

村上議長は、安倍元首相は安民法制や二度にわたる消費税増税、医療や社会保障の削減を強行するなど国民から強い批判を受けてきた政治家で、各世論調査でも「国葬反対」が多数を占めていると強調。「黙とうや半旗、

国葬は法的根拠がなく、安倍政治にお墨付きを与えるものだ」と強調し、「日本の民主主義を壊すことになる国葬は絶対に中止させよう」と呼びかけました。

弔意の掲揚を含め、弔意の強制はしないでほしい」と訴えました。

池場事務局長は「国葬には法的根拠がなく、莫大な税金を使い、国民に負担を強いるのは憲法19条（思想及び良心の自由）に反する」と指摘。

県政策企画局の高宮正明次長は、岸田政権は国葬に対する国民への説明が十分でないとの認識を示し、「弔意を強制するものではない」との国の考えの趣旨を踏まえ、国の今後の議論、社会情勢を見極めながら、よく状況を見て慎重に判断していく」と答えました。

### 鼓動

2014年8月20日に広島市安佐南区や安佐北区に大きな被害をもたらした広島土砂災害は発生から8年を迎えた。災害関連死の3人を含め2〜89歳の77人が犠牲になり、被災世帯は4千を超えた▼次から次へ積乱雲が発生し、同じ場所に強い雨を降らす「線状降水帯」の恐ろしさを認識させられた災害だった。今も地域は復興の途上にある。砂防や治山のダムは100箇所近くで完成した一方、土石流から逃げるための広域避難路は目標とする2024年度末より遅くなるという。当時を知らない子どもたちが増える中、記憶を語り継ぐ重要性も増している▼我が母校の広島経済大学（安佐南区）の興動館「武田山まちづくりプロジェクト」は8年前、ボランティア活動に参加した際、地域住民から「ここ（祇園・山本）で、あの日（こ）を想い、手を合わせる場所があったら」という言葉を聞き、翌年から「鎮魂のキャンドルナイト」を熊岡神社で開催し、追悼と防災について考えるイベントを続けている▼土砂災害警戒区域の指定は、広島県が4万7千を超え全国最多で、島根県は3万2千と2番目に多い。展示パネルで被災を伝える復興交流館モンドラゴン（同区八木）の事務局長で被災地の案内も担当する松井憲さんは「自分を守る力をつけてほしい」と語る。早めの避難という、命を守る教訓を引き継ぎ、住む場所や災害の特徴を踏まえ、命を守る避難方法を考えておこう▼今夏は列島各地で豪雨に見舞われ、災害の脅威をますます身近に感じるケースが増えた。台風シーズンを前に防災への意識を新たにしたい。

（遠）